

「音詩劇 かぐや」 登場人物、あらすじ

果てしなく広がる銀河宇宙。その中の小さな一つの星、地球。
 私たち人間はそこに生を受け、その与えられた時間は百年に
 充つるか充たざるかのもの。

覚ゆるも愛 忘るるも愛
 人の命は ^{はかな}儂くも いとおしい・・・

さあ、物語の開幕です！

<全二幕>
 第一幕
 (休憩)
 第二幕

登場人物

かぐや
 月の姫。輪廻転生を使命とし、
 自らがその象徴である。
 義元の子／青元(命)と
 惹かれ合っている。

命
 義元の子。名は青元。
 人の心や情を大切することが、
 最も重要と考え、父とは対立。

じじ **ばば**
 地球に送られてきた
 かぐやを、深い愛を
 もって育てる。

義元
 銀河の元老。
 銀河世界を治めるには
 厳しい掟が必要と考えている。

義元の家来
星弥 **香築**

月光院
 月の侍従長。
 傷心のかぐやを
 地球に送り出し、
 見守る。

月まどか
 月の侍女頭。
 月光院の下で
 仕える。

月の侍女
こごし **いつぎ** **あこめ**

月の侍従
光林 **天吾**

黙示録の使者たち

折々に、神の啓示／
 天の声を語る者たち。

銀河の人々

歌う人々 子ども達 舞う人々

劇中劇1<少女と父母>

少女 父 母

劇中劇2<人は嘘が好き>

つねの 酒場の人々

第一幕 あらすじ

一、地球と銀河世界・傷心のかぐや

ひとは奇跡のようにここ/地球という星に生まれ、百年に満つるか満たないかの時を、その天と地のはざまに生きてゆきます。

天空の彼方に目をやれば、そこは果ての無い、永遠の銀河宇宙。

そんなことを語る音楽と、大合唱が遠ざかっていくと、視線は人々の物語にフォーカスされます。

銀河世界を治める父/義元^{ぎげん}と、その息子/青元^{せいげん}の考えは真っ向から対立し、かぐやとの愛を育むことも許されません。

義元の家来達から次第に広がった誹謗中傷は、真っ直ぐな かぐやを酷く傷つけ、かぐやは「ガラスの柩^{ひつぎ}」に閉じ籠ってしまいます。ガラスの柩、それは冷たく透き通った床や壁に囲まれ、身を隠すことも出来ない場所。かぐやはその中で怯え、苦しみ続けます。

実はかぐやは、大切な使命^{りんねてんしやう}「輪廻転生」を負っているのです。この世に生まれ、健気^{けなげ}に生を全うし死の世界^{かえ}に還る。そしてまたいつか、何者かとしてこの世に生まれ・・・という輪廻転生。かぐやは自身がその象徴でもあるのです。

月まどか・あこめ・ごごし・光林・天吾たち月の従者は、心を痛め、困り果てていたところ、月光院^{がっこういん}の提案で、蒼き水^{あお}の惑星/地球のじじとばば^{もと}の下へかぐやを託し、健やかな心身を取り戻させよう、ということになります。

<劇中劇I：少女と父母>

地球のとある家族。かぐやとじじとばばとの地上界での幸せな暮らし想起させ、同時に「竹取物語」のお話をここで一度、なぞっています。

さて、かぐやは月まどか達に導かれて、いよいよ地球に向かい、新たな生が始まります。

(音楽番号・曲名)

1. 序の曲
～事始め～
2. 大合唱
～無窮^{むきゆう}の銀河～
3. かぐやの子守歌
その一
～子ども達と～
4. 父と息子
5. 誹謗中傷
6. アリア
～ガラスの柩^{ひつぎ}～
7. 月まどか達の
心労
8. 月光院の提案
～蒼き水^{あお}の惑星～
9. 劇中劇I
～少女と父母～
10. 詩歌
～新しき星の
かぐや～

二、 地上界のかぐや・じじとばばの愛

時は流れ……

かぐや は地上界のじじとばばのもとで、深い愛を一身に受け、健やかで美しく聡明な娘に育ちました。でもそれは、かぐや が月へ戻る日の近いことを、意味しているのです。次の十五夜になれば、かぐや は月へ戻って行かなければならない。そんな苦しい日々を送りながら、じじとばばは大切な「かぐやの子守歌」を口ずさみ、かぐやの吹く笛に耳を傾けます。

三、 地上界のかぐや・変容

傷ついた心を抱えて地球にやって来てから今までのこと、じじとばばとの幸せな時間、にかぐやは思いを馳せます。

そして己の運命と使命(月へ帰る=永遠の別れ=死)を承知しながらも、愛おしい二人ともっと一緒に暮らしたいし、二人も自分と同じ思いなのだ、という感情が溢れ出し、その場に倒れ込みます。

天から届き来るコラール(讚美歌的な歌)に、人々も声を合わせ、かぐやを、見守ります。

(第一幕終了)

~~~~ 休憩 ~~~~

## 第二幕 あらすじ

物語がふたたび幕を開けると、そこには

月光院・月の従者たちが、地上界のかぐやの更なる成熟を、祈りながら見守り続けています。

舞台では、かぐやの心身の成熟への道程が、象徴的な舞と音楽によって表現されています。

11. じじとばばの館

12. かぐやの子守歌  
その二  
~ありがとう~

13. 笛の舞踏

14. アリア  
~かぐやの口上~

15. 時過ぎ去りし 今

16. コラール  
~終わりなき世~

17. 幾年も幾度も  
いくとし いくたび

18. かぐやの変容

#### 四、 地上界での再会

ある蒼く美しい夜、妙なる笛の音に誘われて運命の人/命（青元）が現れます。かぐやと命の二人は、再び出逢ったのです。信じ難い思いで駆け寄り、二人は別の世での再会を喜び合い、思いの丈を込めて言葉を交わします。

どれほどの時を経て会えたのか……。やっと再会出来た二人ですが、かぐやには果たすべき使命が控えており、命もそれを承知しています。一瞬の逢瀬は炎のように燃え上がるのですが、見つめ合ったまま、命はかぐやの前から去って行きます……。

父/義元と香築・星弥たち家来が、いつからかこの逢瀬をじっと見つめていました。彼等は二人の愛に深く心を動かされ、それまでの心情が大きく変化します。

#### 五、 運命と使命

最愛の人との再会も果たし、かぐやは、いよいよ自分はその使命を果たす時が来たという覚悟を、強い意志をもって語り、歌います。

ばばも、決して離れたくない愛おしいかぐやに対して「あなたの飛び立つ時は、今!」と、背中をそっと押すことを心に決めているのです。そして万感の思いを込めてアリア「私らの宝もの」を歌います。

##### 《劇中劇2：人は嘘が好き》

ここは「逃避の酒場」人は時に、重たい荷物を背負って押しつぶされそうになることがある…そんな人たちが集まって来る、ここは不思議な異空間。

かぐやとの別れなど耐えられようもないじじとばばも、この異空間に身を置いて、我ならぬ時を過ごそうとします。

#### 六、 別れ・輪廻転生・結び

そこへ月光院が現れて、別れの時が来たことをじじとばばに告げます。

19. デュエット

～再会～

20. アリア

～蒼き夜に咲く

一輪の花の幻～

21. 義元の心情変化

22. アリア

～運命と使命～

23. アリア

～私らの宝もの～

24. 劇中劇2

～人は嘘が好き～

25. 月光院

～約束の時～

月光院はじじとばばが何の報むくいも求めず、かぐやを慈いつくしんで育てて来たことを優しくねぎら労い、じじは、かぐやへの溢れる思いを、一步一步踏み締めるように歌います。侍女の あこめ・いつぎ・ごし達がじじの思いを汲み取るように寄り添います。

いよいよ別れの時。かぐやは最後の願いにあの「子守歌」を歌って欲しいとせがみます。じじとばば、周りの大人や子供たちも加わって、皆で「かぐやの子守歌」を歌います。

月の従者たちは、今は月世界へかぐやを導きます。それは肅然とした一つの「別れ」。

そしてまたいつか、新しい生命が誕生する……。

十五夜の満月は光を浴びながら、己の運命さだめをしっかりと受け容れて、かぐやはてんと道を行く。

天からはコラールが響き渡り、皆が声を合わせます。「儂はかなくも愛おしい人の命、そして愛。全てこれ、水面に映る月の如し……」と。

この物語はひとまず終わりを迎えようとしています。しかし……

大銀河の星も、奇跡のような生命も、大海原の波のように形を変えて、生まれ、また消える。

時は限りなく移ろい、営みは繰り返し 繰り返し……。

ああ！ 人生は百年にも満たないかのもの。

忘れ得ぬ人 何処いずこに在りしや

完

26. アリア  
～妙なる縁えにし～

27. かぐやの子守歌  
その三  
～輪廻りんねてんしょう転生～

28. 詩歌  
～現うつし世を離れて～

29. コラール  
～全ては幻想～

30. グランド・  
フィナーレ